

障害のある児童及びその保護者に対するスポーツ活動支援 ～障害児運動あそび教室の運営を通して～

Sports Activities Support for Disabled Children and Their Parents
-Through the Management of Children with Disabilities Exercise Play Classroom-

伊藤 弓月

Yuzuki ITO

青森中央短期大学 幼児保育学科

Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

Key words : 障がい児、障害者スポーツ、運動あそび

1. はじめに

2013年9月に2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催が決定したことも記憶に新しいなか、1998年の長野オリンピック・パラリンピック開催以降、“パラリンピック”の存在は一般の人々にも広く認知されつつあり、障がいのある人々が取り組む競技種目やスポーツ活動に対する理解も、一昔前に比べ格段に深まってきたといえよう。

筆者は本学就任以前、宮城県にある宮城県障害者スポーツ協会（以下、協会）に勤務し、障がいのある人々のスポーツ活動を支援する職に就いていた。具体的には、障がいのある人々が参加する各種スポーツ大会の開催、イベント・教室の運営、障害者スポーツの普及・推進ならびに広報・宣伝活動などがその主たる業務内容である。

協会在職当時、宮城県内における障害者スポーツの現状は、参加者の高齢化と共に、若年層の参加がなかなか進んでいないという状況にあった。当時、改めての協会の事業内容を見直したところ、若年層に特化した事業は一つも無かったことから、協会会長の号令の下、協会の新規事業として若年層向けのイベントを立ち上げることとなり、筆者はその中心的な役割を担うこととなった。

2. 障害児運動あそび教室の立ち上げ

若年層向けの新規事業立ち上げに際し、はじめに協会内でその対象年齢の設定について議論を重ねたところ、小学校や特別支援学校入学以前に、障がいのある児童がスポーツ活動に親しむ機会を持つことは極めて少ないのではないかとの見解に至った。事実、当時の協会が実施する事業においても、若年層を対象にした主たる事業といえば、全国障害者スポーツ大会の出場選考を兼ねた「宮城県・仙

「台市障害者スポーツ大会」であり、その参加資格において年齢は満12歳以上と規定されていた。そこで、新規事業の対象年齢については、原則として4歳から12歳までと設定し、年齢以外の部分では、身体障害者手帳および療育手帳を有する宮城県内在住の児童とその家族とした。

さらに、新規事業のコンセプトとして、将来的にスポーツに慣れ親しんでもらうための導入的な位置付けの内容とし、幼少期の児童が身体を動かす楽しさを体験出来ることを目的とした、“運動あそび教室”（以下、教室）にすることとした。

新規事業のコンセプトが決まったところで、次に教室の具体的な内容についての検討を行うこととしたが、筆者も含め、児童を対象とした事業は協会としても初の試みであったことから、まず手始めに協会関係者が園長を務める保育園運動会の視察を行った。また、他都道府県の障害者スポーツ協会において同種の事業が実施されているか情報収集を試みたところ、東京及び福岡の障害者スポーツ協会にて同種の事業が実施されていることが判明したことから、近い方の東京都障害者総合スポーツセンターで実施されている『あそびのひろば』の視察を行った。それ等の視察を踏まえ、教室の内容は、体育館もしくは屋外グラウンドにニュースポーツ用具やレクリエーション用具を中心とした“遊具”を設置し、参加児童がそれ等の本来の使い方にとらわれず、自由に用いて遊ぶことができる場を提供することとした。なお、設置する遊具の準備については、当初協会にはそれ等の所有物がほぼ無い状況であったことから、宮城県スポーツ振興財団による無料のニュースポーツ用具貸出事業を利用するなどして手配を行った。そして、参加児童らの対応については、宮城県内の福祉系大学に所属する学生ボランティア並びに障害者スポーツ指導員の資格を有する社会人ボランティアの参加者を募り、その対応にあたってもらうこととした。

3. 障害児運動あそび教室の実施状況

正式事業名『キッズ・サポート・プログラム（障害児運動・あそび教室）』として、2010（平成22）年の12月4日（土）、宮城県障害者総合体育センターにて最初の教室を実施した。第1回目の参加者数は55名（児童32名・保護者23名）であり、また当日参加児童の対応を行ったボランティア数は29名（学生15名・社会人14名）であった。初年度はその後に2回実施し、計3回の教室を実施した。初年度の参加状況は表1の通りである。

表1 平成22年度 キッズ・サポート・プログラム（障害児・運動あそび教室）実施状況

実施回	日 時	参加者数	参加ボランティア数
1回目	平成22年12月4日（土）	55名（児32名・保23名）	29名（社15名・大14名）
2回目	平成23年1月15日（土）	45名（児27名・保18名）	40名（社22名・大18名）
3回目	平成23年2月12日（土）	87名（児54名・保33名）	37名（社30名・大7名）

※児＝児童、保＝保護者、社＝社会人、大＝大学生

初年度に計3回実施した教室は、参加者より概ね好評を得たことから翌年以降も毎年継続して実施され、現在では宮城県障害者スポーツ協会の主力事業の一つとなっている。筆者は2年目まで直接運営に携わった後に協会を離れたが、教室は3年目以降も順調に参加者を集めている。年度別にみた教室の開催数や述べ参加者数を表2にまとめた。

表2 キッズ・サポート・プログラム（障害児・運動あそび教室）、年度別実施状況

年 度	実施回数	述べ参加者数	述べ参加ボランティア数
平成 22 年度	3 回	187 名（児 113 名・保 74 名）	106 名（社 67 名・大 39 名）
平成 23 年度	11 回	588 名（児 281 名・保 307 名）	375 名（社 181 名・大 194 名）
平成 24 年度	6 回	420 名（児 226 名・保 194 名）	274 名（社 109 名・大 165 名）
平成 25 年度	6 回	462 名（児 240 名・保 222 名）	261 名（社 115 名・大 146 名）

※児＝児童、保＝保護者、社＝社会人、大＝大学生

表2において、教室開催2年目の平成23年度のみ実施回数が多いのは、この年の3月11日に起きた東日本大震災の影響により、予定されていた協会の年間事業の多くが中止となったことに起因する。震災の影響を受け、当時多くのスポーツ大会やイベントが中止となる中、協会として何が出来るのかを検討した結果、主催事業であるキッズ・サポート・プログラム（障害児・運動あそび教室）を可能な限り実施する決定がなされたことと、被災地域からの依頼を受け、教室の“出前”を複数回実施したことによるものである。平成24年度以降については、原則として障害者国体予選を兼ねる「宮城県・仙台市障害者スポーツ大会」を終えた7月以降から翌年の2月までの間に教室を開催しており、平成26年度も全8回の実施を予定している。なお、教室の参加は無料であり、事前の申し込み等も不要である。教室は概ね午前10時から11時30までの1時間半の開催とし、参加者はその間の中で自由に入退場出来るシステムを採用している。

4. 今後の課題

教室は平成26年度で5年目を迎えたが、筆者が直接運営に関わった初年度より、参加児童の保護者からは実施回数の増加を願う声が多く寄せられている。中には、「毎週開催して欲しい」、「有料でも構わないのでもっとやって欲しい」という声もあった。これらの保護者からの声と、表2の述べ参加者数を併せて考えると、教室には少なからず一定のニーズが存在していると考えられる。協会では各年度最終回の教室において、参加保護者の同意を得た上で簡易なアンケートを行っているが、今後はそれ等を活用する方法を含め、参加者のニーズをより正確に把握するための検証を行う必要があると言える。また、初年度より教室の周知・宣伝に関しては、協会HP上における宣伝をはじめとし、関係各所へ実施要綱を送付の上、周知・宣伝の依頼を行ってきた。だが、実際の教室の現場においては、参加者間の“口コミ”による宣伝効果が非常に高く、そのことが新規参加者の獲得に強く影響していた点も見逃せない。更なる新規参加者の獲得を目指していく上で、従来のやり方にとらわれない、より効果的な周知・宣伝方法の確立を模索する必要があるといえる。

今後、教室が更なる発展を遂げていくためには、前述した参加者のニーズ把握や新たな周知・宣伝方法の確立は勿論のこと、これまでの過去5年間の教室運営に関する検証が不可欠である。このことについては、また次の機会に改めて行うものとしたい。

謝 辞

本稿執筆にあたり、ご協力をいただきました宮城県障害者スポーツ協会の小玉一彦会長以下、事務局の皆さま方に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 宮城県障害者スポーツ協会：平成 22 年度キッズ・サポート・プログラム（障害児運動・あそび教室）報告書 2010
- 2) 宮城県障害者スポーツ協会：平成 23 年度キッズ・サポート・プログラム（障害児運動・あそび教室）報告書 2011
- 3) 宮城県障害者スポーツ協会：平成 24 年度キッズ・サポート・プログラム（障害児運動・あそび教室）報告書 2012
- 4) 宮城県障害者スポーツ協会：平成 25 年度キッズ・サポート・プログラム（障害児運動・あそび教室）報告書 2013